

「見かけの現在」について

伊 佐 敷 隆 弘*

「見かけの現在 (specious present)」とはウィリアム・ジェームズ (William James 1842~1910) が 1890 年に公刊した心理学に関する主著『心理学原理¹⁾』の中で提出した概念である。本論文では同書に拠りジェームズのこの概念に関して以下のことを明らかにする。即ち、見かけの現在は瞬間ではなく幅を持つ現在であり、「時間が経過しても過去へ移行しない」、「その中で継起的経験が生じうる」という特徴を持つ (1, 2 節)。この特徴は、見かけの現在が「一体として経験される」こと即ち「意識の連続性」に基づく。さらに、意識の連続性は、見かけの現在がその内部において、また未来と過去へ向けて、「辺縁」を持つことに基づく (3, 4 節)。未来向きの辺縁とは「予視的時間感覚」であり、過去向きの辺縁とは「再生的記憶」から区別された「1 次記憶」である。また、これらの辺縁が我々の未来経験や過去経験の原型である (5, 6 節)。しかし、「見かけの現在」はあくまでも物理的時間の存在を前提にした心理学的概念であり、物理的時間における現在は瞬間であるとジェームズは考えている (7 節)。

1. 「厳密な現在」と「見かけの現在」

ジェームズは「厳密な現在 (strict present)」と「見かけの現在」とを区別する。前者は瞬間²⁾だが後者は幅を持つ。この区別は「客観的現在」と「主観的現在」の区別、或いは「物理的現在」と「心理的現在」の区別として見ることもできる³⁾。

*宮崎大学

¹⁾ [James 1890]。これは 2 巻本であるが、本論文で引用するのはすべて第 1 巻からである。また、本論文において「p. 609」などのページ番号のみの参照はすべて同書からの引用を表す。

²⁾ 厳密な現在が本当に瞬間であるか否かについては、[伊佐敷 2005] で論じた。

³⁾ ジェームズは見かけの現在のことを「感知しうる現在 (sensible present)」(p. 608)「実際に認識されてい

るジェームズによれば、反省は「厳密な現在が存在するに違いない」という結論へ我々を導くが、厳密な現在は我々の直接経験の対象ではなく、我々が経験するのは見かけの現在だけである。「現在の瞬間に注意を向けてみよ。最も困惑的な経験の一つが生じる。現在の瞬間は、捉えると同時に溶け、触れる前に逃げ去り、来た瞬間に去ってしまう」(p. 609)。このようにジェームズは厳密な現在を知覚することの困難を言う。そして、彼は「見かけの現在」という用語を作ったクレイ (E. R. Clay) の文章を賛意とともに引用する。以下がジェームズが引用したクレイの言葉の全文である。

「経験と時間の関係はこれまで深く研究されて来なかった。経験の対象は現在に属するものとして与えられているが、経験の所与が指し示す時間部分は、哲学が『現在』という名で呼ぶ過去と未来の共通境界〔即ち瞬間〕とはまったく異なるものである。所与が指し示す現在は、実は過去の一部即ち直近の過去 (recent past) である。この時間部分は、錯覚によって、過去と未来の間に挟まっている時間〔即ち現在〕として与えられているのである。この時間部分を『見かけの現在』と名づけよう。他方、過去として与えられている過去を『明白な過去 (obvious past)』と呼ぼう。歌の一小節のどの音も聴き手には現在の内に含まれているように思われる。流れ星の場所の変化は見ている人にはすべて現在の内に含まれているように思われる。このような系列が終了した瞬間において、その系列の経過した時間のどの部分も過去でないように思われるのである。したがって、人間による理解との関連で考えられた時間は 4 つの部分から成る。即ち、『明白な過去』『見かけの現在』『真の現在 (real present)』『未来』の 4 つである。もし

る現在 (practically cognized present)」(p. 609)「直観されている持続 (intuited duration)」(p. 630) とも呼ぶ。

見かけの現在を除外したとすれば、時間は3つの(…)非存在からなる。即ち、過去(それは存在しない)、未来(それは存在しない)、そしてこれらの共通境界としての現在、の3つの非存在である。我々にとって時間は『見かけの現在』という虚構の持つ力に由来するのである。」(p. 609)

このようにクレイによると見かけの現在とは「現在として与えられている直近の過去」である。ただし、5節で述べるように、ジェイムズは見かけの現在を未来の方向にも広げて考えているから、ジェイムズの場合、「人間による理解との関連で考えられた時間」は次の5つの部分から成ることになる。

- (1) 明白な過去(過去として与えられている過去)
- (2) 見かけの現在(直近の過去。現在として与えられている過去)
- (3) 真の現在(厳密な現在。瞬間。ただし経験できず、反省によって知られる。)
- (4) 見かけの現在(直近の未来。現在として与えられている未来)
- (5) 明白な未来(未来として与えられている未来)

物理的時間としては、(1)(2)が過去、(3)が現在、(4)(5)が未来である。しかし、(3)は経験の対象ではなく、「現在」として経験されるのは(2)の「直近の過去」と(4)の「直近の未来」である。したがって、結局、ジェイムズの場合、「見かけの現在」とは「現在として与えられている直近の過去および直近の未来」である。

ジェイムズは言う。

「実際に認識されている現在はナイフの刃のようなもの(knife-edge)ではなく、或る幅を持つ鞍のようなもの(saddle-back)であり、我々はそれに座り、そこから時間の2方向〔即ち過去と未来〕を見るのである。我々の時間知覚を構成する単位は持続(duration)であり、それには言わば船首と船尾がある、即ち、前方を見る端と後方を見る端がある。」(p. 609)

このように、「見かけの現在」は幅を持つ持続であり、その両端はそれぞれ未来と過去に向いている。

2. 現在の中における時間経過

見かけの現在の幅の内部で「歌の一小節」や「流れ星」が知覚されるのであるから、見かけの現在の内部で時間の経過が生じていることになる。これに対し、「見かけの現在において時間が経過することは不可能だ」と主張する議論⁴がある。この議論は次の推論からなる。

- すべて現在なら同時ということである。……………①
しかし、同時なら時間の経過はありえない。……………②
したがって、見かけの現在において時間が経過することは不可能だ。……………③

しかし、この議論は「同時」という語を多義的に用いた誤謬推論である⁵。①の「同時」は「同一の現在に在る」という意味であり、②の「同時」は「同一の瞬間的時点に在る」という意味である。もし現在に幅があればこれらは同義ではない。したがって、見かけの現在に対してこの議論は当てはまらない⁶。

では、「現在が幅を持つ」とか「現在が瞬間である」とはいかなることか。今、次の命題Aとその逆を考えよう。

A: 時間が経過すると、現在が過去に移行する。

Aの逆: 現在が過去に移行するとき、時間が経過している。

瞬間としての現在に関してはAもAの逆も成り立つ。しかし、見かけの現在に関してはAの逆は成り立つが、Aは成り立たない。見かけの現在においては時間が経過しても過去に移行しないからである。

同様に、次の命題Cも、瞬間としての現在に関しては成り立つが、見かけの現在に関しては成り立たない。

C: 一つの現在の内部において継起的経験が生じることはありえない。

⁴ 例えば[Paton 1951, pp. 105-107]。ただし、[Mundle 1954, p. 38]の紹介による。

⁵ このことは[McKinnon 2003, p. 318]が指摘している。

⁶ それゆえ、また、[Russell 1915, p. 216]も言うように、見かけの現在の中での「一緒に経験される(being experienced together)」という関係は推移性を持たない。

「継起的経験」とは「経験が相次いで生じ、かつ、そのことを認識している」ような経験のことであり、歌の一小節や流れ星の知覚などがその例である。そして、Cが意味することは、例えば、「一つの現在の内部において複数の音（歌の一小節など）が聞こえる場合、それらはメロディーとして継起的に聞こえることはありえず必ず一緒になって和音（おそらくは不協和音）として聞こえるはずだ」ということである。したがって、命題Cは瞬間としての現在に関しては成り立つ。しかし、歌の一小節の例から分かるように、見かけの現在に関しては成り立たない。

このように、ジェイムズの「見かけの現在」は「命題AやCが成り立たない」という特徴即ち「時間が経過しても過去へ移行しない」、「その中で継起的経験が生じうる」という特徴を持つ。「現在が幅を持つ」とはこのような特徴を持つということである⁷。

しかし、なぜそのような特徴を見かけの現在は持ちうるのか。見かけの現在が「虚構」であると言うなら、それはどのような仕組みの虚構なのか。この問いに答えるためには、ジェイムズの「辺縁 (fringe)」という概念に着目する必要がある。

3. 辺縁

ジェイムズによれば、意識は「感覚やイメージというばらばらのビーズ玉が一本のひもに通されたようなもの」ではない (p. 605)。意識は「鎖」や「列」よりも「川」や「流れ」で喩えた方がよい (p. 239)。というのは、見かけの現在の中における経験内容は互いに浸透しあったあり方で私に知覚されるからである。

例えば、突然の雷鳴が聞こえた場合、「雷鳴の意識の中に、先行する静寂の意識が入り込んで持続しており、雷が鳴るときに我々に聞こえるのは純然たる雷鳴ではなく、静寂を破り静寂と対照をなす雷鳴」(p. 240)である。それゆえ、音の物理的性質としてまったく同一の雷鳴であっても「突然聞こえてきた」場合と「先行するいくつかの雷鳴の後に聞こえてきた」場合とでは雷鳴の感じ (feeling) は異なる (p. 240)。

このように、我々の知覚内容には「過ぎたことのかすかな知識 (inkling)」が含まれている (p. 241)。歌の一小節に含まれる個々のどの音もそれ以前の個々の音

の感じを含んでおり、流れ星の個々の位置の見えもそれ以前の位置の見えのかすかな知識を含んでいる。このかすかな知識や感じが「辺縁⁸」である。このように、「心に現れる個々のイメージはいずれもその辺縁と融合して一体となっている」(p. 255)。言い直せば、見かけの現在の中における経験内容は互いに浸透しあっている。

また、見かけの現在と「明白な過去」や「明白な未来」との境界も曖昧である。というのは、見かけの現在はその内部が浸透しあっているだけでなく、その周辺にも「ぼんやりと消えていく後向きの辺縁と前向きの辺縁」を持っている (p. 613) からである。

見かけの現在の中における経験内容が例えば ABCDE → BCDEF → CDEFG と変化した場合、AやBのように順次消えて行く部分はなかなか消えずに残りゆっくりと消えて行く。これが回顧的時間感覚 (retrospective sense of time) である。他方、FやGのようにすぐにやって来る部分の前触れ (foretaste) が予視的時間感覚 (prospective sense of time) である。これらの回顧的時間感覚と予視的時間感覚が見かけの現在の2方向の辺縁であり、それぞれ記憶の萌芽と予期の萌芽となる (p. 606)。

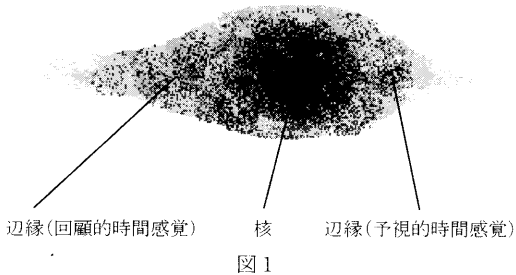
こうして、見かけの現在はその内部が辺縁によって浸透しあいつつ、その全体が過去と未来の方向へ伸びる辺縁を持っている。結局、見かけの現在は図1のような「核」と「辺縁」を持つ彗星に似た内部構造を持つ⁹。これらの辺縁の存在の故に、見かけの現在においては時間が経過しつつも過去への移行が感じられないということになる。

⁸ 「辺縁」をジェイムズは「光背 (halo)」「半影部 (penumbra)」「心的倍音 (psychic overtone)」「あふれ出るもの (suffusion)」とも呼ぶ (pp. 255, 258)。

⁹ 未来方向の辺縁は過去方向の辺縁に比べると「複雑さが小さい」(p. 606)とジェイムズは考えているので、図1では長さを小さくした。なお、本論文における図はすべて伊佐敷が作成したものであり、ジェイムズにこれらの図があるわけではない。また、「核」はジェイムズ自身の言葉だが、「彗星」は彼の言葉ではない。

ところで、フッサールの「過去把持 (Retention)」「未来予持 (Protention)」とジェイムズの「回顧的時間感覚」「予視的時間感覚」との間には類似性があり、フッサールがジェイムズの『心理学原理』から「強い刺激を受けた」ことに関してはフッサール自身の証言 ([フッサール 1928, pp. 221-222 訳注]) がある。ちなみに [フッサール 1928, pp. 42, 48] は過去把持を「彗星の尾」に喩えている。

⁷ ただし、この定式化は [伊佐敷 2005] によるものであって、ジェイムズによるものではない。



ジェームズは見かけの現在の幅の大きさについて「持続の明確な直観は12秒を超えることはなく、他方、曖昧な直観はおそらく1分を超えることはないであろう」(p. 630)と言う。「持続の明確な直観」というのが図1の「核」に相当する(p. 613)。この「12秒」という数字はいくつかの実験結果に基づく。ただし、ジェームズ自身が実験したわけではなく、「3.6~6秒」という別の実験結果も彼は引用している。他方、辺縁まで含んだ場合が「持続の曖昧な直観」に相当するが、その「1分」という値について彼は特に根拠を挙げていない。しかし、辺縁は曖昧に連続しているものであるから、核と辺縁の区別は相対的なものに過ぎず、また、辺縁がどこまで続いているかもはっきりした境界があるわけではない¹⁰。

要するに、見かけの現在において、時間が経過しつつもそれは要素に分解されることなく一体として(即ち、「ひとつの現在」として)経験される。これをジェームズは「意識の連続性 (continuity of consciousness)¹¹」と呼ぶ。結局、見かけの現在の「時間が経過しても過去へ移行しない」、「その中で継起的経験が生じる」という特徴は「意識の連続性」およびそれを支える「辺縁」によって可能になっている。

4. 事後的注意による意識内容の分解

しかし、「意識の連続性」というジェームズの主張に

対し次のような批判がありうるかもしれない。即ち、

「現在の意識内容がABCDE → BCDEF → CDEFGと変化するという説明において既に意識内容がAとかBというふうに個別化されている。それらが互いに浸透しあっているといても区別がないわけではあるまい。そもそも区別がなければそこに『変化』があることさえ知覚できないはずだ。とすれば、『見かけの現在が一体として経験される』という説明は間違っている。」

つまり、「意識内容の個別的把握」と「見かけの現在の経験の一体性」とが矛盾するのではないかという批判である。これに対するジェームズの答えは「感覚的知覚にとって〔見かけの現在の内の〕要素は分離不可能である。ただし、事後的注意 (attention looking back) が容易にこの経験を分解し、その始めと終わりを区別するのであるけれど」(p. 610) というものである。言い直せば、「心的状態の直接の感じられたまま」と「後の反省作用によるその知覚」を区別すべきだ¹² という答えである。確かにメロディーの知覚の場合に明らかなように我々は見かけの現在における自分の意識内容をその要素へと分解することができる。例えばひとかたまりとして聞こえたメロディーを個々の音に分解して楽譜に記録することができる。しかし、実はそれは事後的な注意による分解なのであって、知覚の最中にも同じ分解が生じているわけではないというのがジェームズの主張である。ジェームズはロックやヒュームを批判して次のように言う¹³。

「ロックの単純観念やヒュームの単純印象は抽象であって経験の中には現れない。経験が最初に我々に与えるのは具体的対象である。この対象は、それを時間空間的に包む世界の他の部分と曖昧に連続しており、かつ、その内部の要素や部分に分割される潜在的可能性を持っている。」(p. 487)

つまり、ロックやヒュームは事後的な分解の結果を「心的状態の直接の感じられたまま」と混同したのだと彼は批判しているのである。例えばメロディーの知覚のような継起的経験についても最初に経験に与えられる

¹⁰ 例えば、過去向きの辺縁が「数時間」に及ぶとジェームズが言っている箇所 (p. 636 fn.) もある。「最近 (recency)」という感じが数時間前の出来事について感じられることがあるからだと言う。しかし、これは後述の「2次記憶」にむしろ近いのではないか。

¹¹ ただし、「意識の連続性」という語は『心理学原理』の2年後に出版された短縮版である [James 1892] におけるものであり、『心理学原理』では「思考 (thought) の連続性」と呼んでいる。しかし、内容は同じである。

¹² [James 1884, p. 986]。

¹³ ただし、ジェームズによるロックやヒュームの解釈が妥当であるか否かについては留保する。

のはあくまでも「一体としてのメロディー」である。そのメロディーがドの音で始まりミの音が続くものだった場合、我々はまずドを知覚した後にミの音を知覚し両者の知覚に基づいて意識の中でそのメロディーを構成しているわけではない、ということである。ジェームズは言う。

「一方の端が他方の端に継起 (succession) するという関係は、持続のかたまり (duration-block) の部分としてののみ知覚される。我々は、『まず一方の端を感じた後にもう一方の端を感じ、この継起の知覚に基づいて両端の間の時間間隔を推理する』のではない。我々は、この時間間隔を全体として、即ち、その二つの端がそこに埋め込まれた全体として、感じているように思われる。経験は最初から総合的所与 (synthetic datum) であり、単純な所与 (simple datum) ではないのである。」(p. 610)
「持続という概念は継起という概念に先行する。」(p. 609 脚注)

このように、ジェームズの考えによれば、「意識内容の個別的把握」は事後的に行われることであるから、「見かけの現在における経験の一体性」と矛盾しないということになる。

5. 未来向きの辺縁

「辺縁」の特徴についてさらに具体的に見て行こう。1節で述べたように、クレイが見かけの現在を過去に限っているのに対し、ジェームズによれば見かけの現在は過去と未来の両方向へ伸びている¹⁴。

未来方向の辺縁（即ち予視的時間感覚）の例としてジェームズが挙げるのは「何かを言おうとするときの心的状態」や「初めて見た文章を朗読する際の次の語句の予期」(pp. 253-254)などであるが、先に挙げた歌の一小節を聴いたり流れ星を見たりする場合にもそれらの「動き」が感じられる以上、我々は近い未来を予視していると彼は考えていたと思われる。というのは、眼前の出来事を「動き」として見ることは、そこに「未来を見て取る」ことを含んでいるだろうからである。

最近の心理学においてこれを例証する報告¹⁵があ

る。即ち、脳の或る部分を損傷した人がカップにコーヒーを注いでいくとき、「今カップのどこまでコーヒーが入っているか」は分かるのだが、それを「コーヒーの量が増えて行く運動」として見るができないために、カップからコーヒーが実際にあふれ出るまで「あふれそうだ」と気づくことができない、という例である。その患者にとって液体の流れはあたかも氷河のように固まって見えるらしい。つまり、この患者には視覚に関して未来向きの辺縁が欠けている¹⁶。

なお、見かけの現在が「ひとつの現在」として経験されるからといって、未来方向の辺縁と過去方向の辺縁とがまったく同質の感覚であるということはありません。もしそうであるなら、「徒競走の選手の場合、見かけの現在の幅が広いほど号砲が早く聞こえて有利だ」というナンセンスな帰結¹⁷が生じる。例えばメロディーを知覚している際、メロディーが予期どおりに動く場合と「意外だ」と感じる場合の違いは当人にとって明白である。つまり、経験の内容が未来方向の辺縁と過去方向の辺縁のどちらに含まれているかは（いずれも「現在として」感じられるという点は共通だが）はっきり違ったふう感じられるはずである。

では、過去向きの辺縁である「回顧的時間感覚」とはいかなるものであるか。

6. 1次記憶と2次記憶

回顧的時間感覚をジェームズは「1次記憶 (primary memory)」と呼び、これに対し再生的記憶を「2次記憶 (secondary memory)」と呼ぶ (p. 630)。前者は「今過ぎ去ったばかりのものとして、見かけの現在の中で直接に出来事を知覚すること」であり、後者は「出来事が一旦見かけの現在の後端から完全に消え去った後にその出来事を再生すること」である (p. 630)。

両者の違いとして次の表にある (1) (2) (3) の3点を取り出すことができる (pp. 646-647)。これらの特徴および3節で述べた見かけの現在の幅の大きさからも窺われるように、ジェームズの1次記憶は、今日の心理

97]に分かりやすい紹介がある。

¹⁶ ただし、この患者は聴覚に関しては未来向きの辺縁を持っている。というのは、自動車が自分に近づいて来るのを見ることはできないが、音を頼りに自動車の接近に気づくことはできるからである。

¹⁷ [Plumer 1985, p. 22]はこの帰結を「見かけの現在」という概念の難点だとする。しかし、この批判は成り立たない。

¹⁴ この点に関して [Broad 1938, pp. 283-284] はジェームズを批判し、過去方向の辺縁しか認めない。

¹⁵ [Zihl et al. 1983, p. 315]。なお、[荻原 1998, pp. 92-

	1次記憶	2次記憶
(1)	消失せずに保持されたまま働く。 (想起されない。)	一旦消失してから再生的に働く。 (想起される。)
(2)	注意を向けなかった場合、数秒間で消える。	長期間保持される。
(3)	その対象が「現在」として感じられる。 (現在として与えられている過去)	その対象が「過去」として感じられる。 (過去として与えられている過去)

学に言う「感覚レジスタ」「短期記憶」「ワーキングメモリ」¹⁸のいずれとも重なるようなかなり包括的な概念である。

ジェイムズによれば、2次記憶を持たず1次記憶だけを持っている生き物も(過ぎ去りつつある数秒間に限られるが)時間感覚を持つことが可能である(p. 630)。1次記憶は「我々が常に感じている、過去性の特有な感じ」であり、それは「我々の過去経験や過去概念の原型」である(p. 605)。つまり、1次記憶があつて初めて2次記憶が可能になる。

人間にとって、過去や未来が「考えられた時間(conceived time)」であるのに対し、見かけの現在は「直観された時間(intuited time)」である(p. 643)。そして、過去や未来の原型は見かけの現在(に含まれている両方向の辺縁)であるから、結局、「考えられた時間の原型は見かけの現在だ」(p. 631)ということになる。ジェイムズは言う。

「より長い時間はこのぼんやりとした単位(即ち見かけの現在)を付け加えていくことによって、また、より短い時間はこの単位を分割することによって、考えられ、我々は習慣的にそれらを記号によって思考するのである。」(p. 642)

ここに言う「見かけの現在を付け加えていく」とは、見かけの現在を「心の中で延長することによって大きな持続を構成する」(p. 610)ということである。このような仕方では1次記憶に基づいて「過去」概念や2次記

憶が成立することになる。

尤も、この説明に対しては「どうやって見かけの現在を心の中で延長していくことができるのか」という疑問がありうるだろう。1次記憶と2次記憶の違いに関して、例えばラッセル¹⁹は「過去の対象を知るには直接記憶[1次記憶]さえあればよいが、『過去』が何を意味しているかを知るには、直接記憶自体が経験の対象にならなければならない」と言う。とすれば、2次記憶の成立には、(1次記憶の場合と違って、)1次記憶自体を対象とする高次の意識の存在が必要かもしれない。しかし、見かけの現在から過去や未来がいかんにして構成されるかについてジェイムズは十分な説明をしていない。

ただし、「見かけの現在が我々の過去経験や未来経験の原型である」というジェイムズの議論はあくまでも心理的時間に関する議論であつて、心理的時間とは別に物理的時間が存在することは『心理学原理』において明示的に前提されている。そこで、最後に、物理的時間と見かけの現在の関係について検討しよう。

7. 物理的時間と見かけの現在

ジェイムズは「厳密な現在」と「見かけの現在」の関係について次のような説明をしている(pp. 629-630)。

「我々の思考の実際の時間の流れ」を水平線で表し、「時間の流れについての思考」即ち見かけの現在をこの水平線上の一点に立てられた垂直線で表す。この水平線は物理的時間に相当し、この一点は「意識が通過する瞬間」即ち「厳密な現在」に相当する。垂直線の長さは見かけの現在の幅の大きさを表す。ただし、垂直線の端は実際はぼんやりしている。垂直線は水平線上を右向きに移動し、その内容は変化し続ける。ジェイムズのこの説明を図に表すと図2のようになるだろう。

この説明において、見かけの現在は「厳密な現在」という「瞬間」において知覚されている。つまり、この説明では「瞬間的な知覚」というものが考えられている。マボット²⁰は、「瞬間的な知覚」のような心的作用は存在しえないが故に「見かけの現在」という概念は支持できない仮説だ、という批判をおこなった。しか

¹⁸ 「感覚レジスタ」は0.5~2秒間感覚内容を保持し、容量は極めて大きい。「短期記憶」は約30秒間記憶内容を保持し容量は小さい(7項目程度)。「ワーキングメモリ」は数分間保持し、途中で記憶内容が加工されて行く点に特徴がある(文の理解や暗算の際に働いている)。

¹⁹ [Russell 1915, p. 226]。

²⁰ [Mabbott 1951, pp. 158-159]。

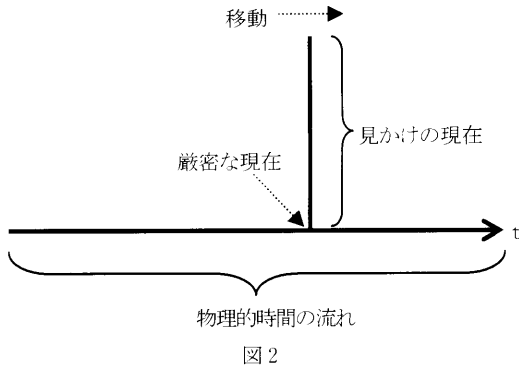


図 2

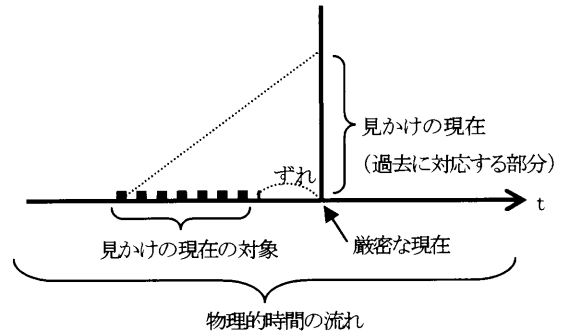


図 3

し、マボットの批判は成り立たないと思われる。

問題の焦点は「瞬間的」の意味にある。「瞬間的知覚」という語には少なくとも次の(1)(2)の2つの意味がある。

(1) まず、「瞬間的知覚」には「対象の瞬間的状態の知覚」という意味がある。確かに、これまでまったく存在しなかったものが一瞬だけ存在してすぐに消滅した場合、その「一瞬」にまったく長さがなかったら、我々がそのものの存在に気づくことは不可能であろう²¹。しかし、持続して存在している対象物の連続的な変化を一定の時間をかけて知覚している場合は事情が異なる。尤もここでマボットのように知覚を作用(act)と見なすと、「瞬間的作用」という概念自体が(作用の開始から終了までの所要時間がゼロであることを要求しているように思われるが故に)不合理に感じられるかもしれない。しかし、これに対し、ジェームズのように知覚を心的な過程(process)ないし状態(state)と見なせば、「連続的変化の一断面としての、対象物の瞬間的状态」に対応して「心的過程の一断面としての、瞬間的な心的状態」が存在すると想定しても特に不合理な点はないのではないかとすれば、この意味での「対象の瞬間的状態の知覚」は存在すると言ってよいと思われる。

(2) 他方、「知覚の原因が発生してから知覚が成立するまでの所要時間がゼロだ」という意味での「瞬間的な知覚」は不可能であろう。例えば、「音源における音の発生→空気の振動→鼓膜の振動→聴覚神経の興奮→大脳の興奮」のどの段階を「知覚の原因の発生」と見なそうと、最後の脳においてすらミリ秒単位でのプロセスが生じている以上、我々が知覚する対象は多

少とも過去の出来事である。しかし、このずれは「見かけの現在」という概念が不合理な概念であることを示すわけではない。というのは、このずれは、見かけの現在の対象である過去の出来事の範囲が図3のように厳密な現在から過去の方へ少しずれているということの意味するにすぎないからである。

いずれにしても、ジェームズは心理的時間から区別された物理的時間を前提した上で「見かけの現在」という概念を提出しているのである。

おわりに (心理学と哲学)

このように、『心理学原理』におけるジェームズは哲学者というよりも心理学者であり、彼は「心的状態と脳状態の対応」を前提に同書を書いている。即ち、「意識はその時点における脳の活動全体に対応して」おり、「本書において心と脳のこの相関関係から私は外れることはないだろう」(p. 177)と彼は言う。そして、その限り自分の心理学は「実証的」であって「非-形而上学的」であると言う(p. 182)。

しかし、同時に、ジェームズは、心的状態と脳状態の対応は同書において「経験的にのみ書きうるのであって、その説明は全く現れていないことを告白する」と言い、「脳が意識を引き起こすということはひとつの謎である」と言う(p. 687)。つまり、心的状態と脳状態の対応を経験的な事実として認めるとしても、この「対応」が何を意味しているかを問題にすると(即ち心身問題に踏み込むと)「心理学から形而上学へ移ることになる」(p. vi)と言うのである。したがって、例えば物的一元論・心身二元論・中性一元論などによって心身問題に答えようとする自然科学から形而上学

²¹ [大森 1994, p. 35] [大森 1992, p. 99]。

へ移ることになる。実際、『心理学原理』を1890年に公刊した後のジェイムズは心理学から哲学へ研究の重点を移して行った。やがて彼は自分の哲学を「根本的経験論 (radical empiricism)」と名付けるに至る²²が、これは心的でも物的でもない「純粹経験 (pure experience)」が世界の基本的な素材である²³とする立場、即ち、中性一元論の立場である。

「時間とは何か」「時間はどのように経験されるか」という問いは「時間の哲学」に属しうる問いである。しかし、「時間はどのように経験されるか」という問いが物理的時間の存在を前提してなされる時、この問いは「時間の心理学」に属する。ジェイムズの「見かけの現在」という概念はこのような意味で「時間の心理学」に属する概念である。

しかし、心身問題へ踏み込むことによって心理学から哲学へ移行するのであるなら、その際、「時間の心理学」から「時間の哲学」への移行も生じうるであろう。したがって、「心身問題と時間論との関連を見定めること」、或いは、ジェイムズ解釈に即して言えば、「中性一元論における時間経験の位置づけを明らかにすること²⁴」、このことが次なる課題となる。

* 本論文は科学基礎論学会2004年度講演会における発表原稿に加筆したものである。司会者ならびに会場からいただいた貴重な示唆に感謝したい。

参考文献

- Broad, C. D. (1938) *Examination of McTaggart's Philosophy*, Thoemmes Press, Vol. 2, 2000.
 フッサール, エドムント (1928) 『内的時間意識の現象学』みすず書房, 1967年。
 伊佐敷隆弘 (2005) 「現在は瞬間か」日本科学哲学会編『科学哲学』第38-1号, pp. 31-45。
 James, William (1884) "On Some Omissions of Introspective Psychology," *Mind*, vol. 9, pp.

1-26, reprinted in William James, *Writings 1878-1899*, Library of America, 1992, pp. 986-1013.

- James, William (1890) *The Principles of Psychology*, 2 vols., Dover Publications, 1950.
 James, William (1892) *Psychology: Briefer Course*, reprinted in William James, *Writings 1878-1899*, Library of America, 1992, pp. 1-443.
 James, William (1904a) "Does Consciousness Exist?" *Journal of Philosophy, Psychology and Scientific Methods*, vol. I No. 18, reprinted in William James, *Writings 1902-1910*, Library of America, 1987, pp. 1141-1158.
 James, William (1904b) "A World of Pure Experience," *Journal of Philosophy, Psychology and Scientific Methods*, vol. I No. 20 and No. 21, reprinted in William James, *Writings 1902-1910*, Library of America, 1987, pp. 1159-1182.
 Mabbott, J. D. (1951) "Our Direct Experience of Time," *Mind*, vol. 60, pp. 153-167.
 McKinnon, Neil (2003) "Presentism and Consciousness," *Australasian Journal of Philosophy*, Vol. 81, No. 3, pp. 305-323.
 Mundle, C. W. K. (1954) "How Specious is the 'Specious Present'?" *Mind*, vol. 63, pp. 26-48.
 大森荘蔵 (1992) 『時間と自我』青土社。
 大森荘蔵 (1994) 『時間と存在』青土社。
 亭阪直行 (1998) 『心と脳の科学』岩波書店。
 Paton, H. J. (1951) *In Defence of Reason*, Hutchinson's University Library.
 Plumer, Gilbert (1985) "The Myth of the Specious Present," *Mind*, vol. 94, pp. 19-35.
 Russell, B. (1915) "On the Experience of Time," *Monist*, vol. 25, pp. 212-233.
 Zihl, J., von Cramon, D., and Mai, N. (1983) "Selective Disturbance of Movement Vision after Bilateral Brain Damage," *Brain*, vol. 106, pp. 313-340.

²² [James 1904b, p. 1160].

²³ [James 1904a, pp. 1142, 1144, 1145].

²⁴ 『心理学原理』の時期のジェイムズは見かけの現在を「虚構」だと考えている。しかし、根本的経験論に言う「純粹経験」はかつての「見かけの現在」に相当するものであり、逆に「厳密な現在」は「概念化によって生じた派生的な存在」という地位を与えられているように思われる。ただし、ジェイムズの根本的経験論の解釈および彼の心理学との関連については稿を改めて取り組むべき課題である。